

屋久杉に学ぶ自然の摂理



川瀬 泰人

樹齢7,200年、とてつもなく昔から生きている杉が屋久島にはある。その名を「縄文杉」という。図1がその勇姿である。屋久島が凄いのはそれだけではない。本州では500年が杉の寿命と言われているのに樹齢1,000年を超えないとこの島では屋久杉と呼ばないのである。島内にある屋久杉の数は、開拓された登山道から見えるものだけでも少なくとも数十本、未開の森にどれだけあるのかは想像を絶する。

それではなぜこの島の杉は永生きなのか。生育している環境によるものだという事は少し考えれば誰にでも理解ができる。私は1年半ほど前から名刺に縄文杉の写真を入れている。名刺交換の折、興味を持っていただいた人に「なぜ屋久杉は永生きなのか」を問うてみる。ほとんどの人が、「杉に適した環境だから」だと答える。

しかし、屋久島では雨は年間10,000mm以上降っている。そのため全体が花崗岩でできたこの島には土があまり堆積していない。それが証拠に豪雨になると川の水は茶色ではなく緑色になる。土ではなく植物が流れてくるのである。常に養分が薄い水しかないので、屋久杉は成長が遅く、年輪の間隔は0.5~0.6mmしかない。本州の杉とは断面のきめ細やかさ、模様の複雑さがまるで違う。それに屋久杉の老木はどの木も皆、まともな格好をしていない。原因は自然の力によるものである。表1に屋久杉の巨樹の一部を示すが樹高が20~30メートルしかなく、本州で見る数十メートルもある高いものはこの巨樹にはない。頭部がいつの日かに台風あるいは雷に折られて、しかし、そこから枝葉を広く張り巡らせて光合成ができるようにしてきたということが見て取れる。ずんぐりむっくりしていて、まるで大根のような、とても杉とは思えないこっけいな姿をしている。

これが自然界で生き残る条件を備えた頑強な杉の最終形といえるのではないか。過酷な条件下で育ち、環境の変化にうまく対応し、どのような災難にも耐え抜いてきたからこそ永生きできているのではないか…。

このことは人間や企業に置き換えて考えるとより身近に感じる事ができ、解りやすい。環境の変化について行けない企業(または人間)は生き残れないし、問題にぶつかったとき、逃げずに真っ向から取り組み、解決するような企業(または人間)あるいは淘汰されない術を適時身につける事ができる企業(または人間)でなければ最後に勝ち残れないということを「屋久杉」は教えてくれていると思えてならない。これこそが自然の摂理であり、淘汰される側にまわることの無いような人生を送りたいと考えている。



図1 縄文杉

表1 屋久杉の巨樹

名称	推定樹齢 [年]	胸高周囲 [m]	樹高 [m]
縄文杉	7,200	16.4	25.3
大和杉	4,000	10.2	34.9
大王杉	3,000	11.1	24.7
紀元杉	3,000	8.1	19.5
万代杉	3,000	8.6	13.2
弥生杉	3,000	8.1	26.1
母子杉(母)	2,600	9.0	31.1